



# この眺め 残り1年



昔の火の見やぐら  
解体前に上りました

望楼から南西方向を望む。瀬戸内海に向かって法華山谷川が流れ、河口には電源開発(Jパワー)の火力発電所がある



石切り場  
高御位山も

北側では新本庁舎の整備が進む。奥には龜山石の石切り場、高御位山が見える

高さは地上約24m。本庁舎3階から、らせん状の階段を使う。普段は一般の来庁者が立ち入ることはない。許可を取って上ると、周囲に高い建物が少なく、くると景色が見渡せる。真北は、高級石材で知られる龜山石の石切り場。むき出しになった岩盤が採石の歴史を感じさせ、奥に高御位山の稜線を望む。視線を足元に移せば、2021年秋に完成予定の新本庁舎(一部5階建て)の建設工事が進められている。東西に一戸建ての住宅が立ち並び、臨海部では大手企業を含む工

業地帯が稼働。職住の近さを実感する。現在の本庁舎は、2017年に建てられた名残という。市消防本部の機多光一隊長が「電話の普及に伴い、70年代ころにかけて使われなくなったようです。かつては24時間交代で監視する勤務がありました」と説明してくれた。新本庁舎が完成すれば、現本庁舎の建物は2022年春にかけて解体され、望楼からの景色も、あと1年ほどで見られなくなる。



かつて火の見やぐらとして使われていた望楼＝高砂市荒井町千鳥1



新幹線も

一戸建ての住宅街が広がる北東方向。山陽新幹線が貫く

高砂市役所の本庁舎屋上、管制塔のような形の望楼が残されている。頂上部の部屋は四方ガラス張りだが、当然ながら近くは飛行場はなく、普段使われている様子もない。同市の庁舎管理担当者に聞くと、「昔は火の見やぐらとして使われていました。市内を一望できます。ならば一度、上ってみたいよ」

(若林幹夫)

## 8月27日 神戸新聞分

暦の上では夏の終わりに見る日本の原風景の多くが消えようとしています。アナログな時代に、より多くのより適確な情報を取り出す努力をしていた当時を語る建物がまた失われます。